

中国の対外政策 -- 日中のこれから (ライブラリ・コーナー)

著者	澤田 裕子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	258
ページ	46-46
発行年	2017-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00048882

中国の対外政策

—日中のこれから—

澤田裕子

尖閣諸島領有権や南シナ海の問題など、国際社会においては、中国の軍事力の増強と積極的外交は、鄧小平時代の「韜光養晦」(力をみせず静かに力を蓄えよ)方針を離れ、世界のパワーバランスを変えつつある。国家としては二〇二一年に中国共産党一〇〇周年、二〇四九年に中華人民共和国建国一〇〇周年という重要な節目を迎える中国について、対外政策から理解し、日中関係の今後を展望するための資料を最近の出版物から紹介したい。

東京大学出版会から二〇一五年に刊行された「超大国・中国のゆくえシリーズ」第二巻の青山瑠妙、天児慧著『外交と国際秩序』は、中国外交の歴史を振り返り、経済活動とともに伸張する近年の対外関係を概観する。外交理念を国内の政治論争、さらに国際秩序観を伝統文化から考察し、歴史的要因を考慮して外交現象の分析を試みている。天児による、中国外交の重要政策の決定権は特定個人からトップ集団へと移行しており、政策決定の多元化が進んでいる。あわせて、社会環境も多元化しており、現状認識、未来のあり方をめぐる論議が、中国の対外戦略、外交政策に影響を及ぼすようになっている。現代中国を総合的に捉え

核心的問題を理解するための視座を与えてくれるだろう。

次に中国の外交戦略に焦点を当てた最近の資料を紹介したい。三船恵美著『中国外交戦略——その根底にあるもの——』(講談社、二〇一六年)は、世界的な趨勢に基づいた自己認識、国際関係上の利益、特定の主要敵国を想定した統一戦線、中国特有の大国意識を中国外交の特徴として挙げ、これらの特徴を踏まえて、中国が展開する大国との協力外交および周辺国との善隣外交について解説している。エドワード・ルトワック著、奥山真司訳『中国四〇——暴発する中華帝国——』(文藝春秋、二〇一六年)は、世界中の大学や軍の幹部学校で教育に従事し、各国政府の首脳に戦略的提言を行ってきた著者へのインタビューをまとめたものである。戦略家としての実践的視点から中国の外交戦略を分析している。

また、「シリーズ日本の安全保障」第五巻の川島真編『チャイナ・リスク』(岩波書店、二〇一五年)は、中国側から見る安全保障環境、人民解放軍、核ミサイルと中朝関係、海洋進出などの中国の軍事・安全保障政策について考察している。さらにリスクも多元化しているとして、ネ

ット社会での民意の台頭、環境問題、経済リスク、歴史認識問題にも焦点を当てて分析している。特に歴史認識問題は、中国の国内問題と深く関わっており、領土問題などとともに中国の国際的広報戦略において重要視されていると指摘している。歴史認識問題を適切に処理することは安全保障上、重要なことであるとし、日中間で協調できる国民感情をすくいとっていくことを提言している。

中国の対日認識については、『アジア研ワールド・トレンド』二〇一六年二月号に掲載された分析レポート、江藤名保子著「中国ナショナリズムと対日認識の連動性」(http://d-arch.ide.go.jp/idedp/ZWT/ZMT201601_016.pdf)が、なぜ歴史認識と領土問題がクローズアップされるのか、中国のナショナリズムとの関連性について考察している。

最後に日中のこれからを展望する諸々の論考も紹介したい。梶谷懐著『日本と中国、「脱近代」の誘惑——アジア的なものを再考する——』(太田出版、二〇一五年)は、民主主義公共性、立憲主義、市場経済といった分野における相違や相互の影響を踏まえ、両国間の関係、および地域秩序について論じている。中国経済の専門家である著者は、烏坎村と重慶、左派と右派、国家と民間、日本と中国をテーマとする各章で、それぞれ乖離した論説の「あいだ」に橋を架けようと試みている。社会のゆ

がみをもたらす由来を「外部」ではなく自らの内部にもとめる思想や行動を肯定する姿勢にこそ、日中相互の排外的なナショナリズムを越える力があるのではないかと問いかけている。

張承志著、梅村坦監訳『中国と日本——批判の刃を己に——』(亜紀書房、二〇一五年)は、二〇〇九年に出版された『敬重与惜別——致日本——』(中国友誼出版)の翻訳である。著者は北京在住の作家で、少数民族としての出自、イスラム教への入信、日本での研究生生活といった背景を持つ。「どこからはじめようか」ということばで始まる本書は、日本の歴史・文化・人物から中東との繋がりがまで幅広く取り上げながら、アジア主義・民族主義をめぐる「中国と日本とのほぐれにくい堅い結び目」に対する交錯した思いを真摯に伝えてくる。国家に遮断されたとしても互いに手を結び、激しい痛みのなかに身を置きつつも、徹底的な人道主義を追求したいという知識人としての志は、多くの読者に「無限の着眼点を開示する」機会を与えてくれる。

今年二〇一七年は日中国交正常化四十五周年にあたり、二〇一八年には日中平和友好条約締結四〇周年を迎える。両国の友好関係が続くことを祈りたい。

(さわだ ゆうこ/アジア経済研究所 図書館課)